

ラ・ロシュフコオの人間観

吉 川 浩

(1)

ラ・ロシュフコオ (La Rochefoucauld, 1613-1680) の『箴言集』(«Maximes», 1665) ほど読者の気質によってその評価が極端に相反する著書は珍らしい。ある種の人々はそれを比類なき人間認識の書として常に座右に置き、又、ある種の人々はそれを人間の弱点にのみ目をむけ人間性の善を無視する背徳の書として嫌悪する。

出版当初から長く後世に到るまで、この『箴言集』は徹底的な讃美、共感か、さもなくば徹底的な反撥、嫌悪を受けてきた。同時代の詩人ラ・フォンテーヌはいち早くラ・ロシュフコオに詩を献じて、『箴言集』こそ人間性の真実を映し出す美しい鏡と讃めた⁽¹⁾。又、十九世紀のコンスタン、バルザック、スタンダール、サント・ブーヴ、フロオベル等々はこれを最も深い人間性理解の書として高く評価している。

一方、同時代の優雅な心理分析小説『クレヴの奥方』の著者ラ・ファイエット夫人は、後年ラ・ロシュフコオの心友となったとはいえ、サロンで全ての人間の美德を否定し去る数々の箴言を読みきかされた時には、「このようなことを想像できるとは、精神と心に如何なる墮落を持っていなければならぬことでしょうか。」と驚き歎いたのであった。この言葉は当時のサロンにまた起った驚愕と誹謗を代表している。更に、ヴィクトル・クーザンのように、ラ・ロシュフコオの思想に対する反撥から、かかる

(1) La Fontaine: «Fables» I, XI. “L’Homme et son image”

(2) M^{me} de La Fayette: Lettre à M^{me} de Sévigné (1664)

背徳の思想は著者自身の人格そのものの腐敗によるとして、著者の人間的価値をも否定した人をはじめ、ルソオ、サンド、ユゴーなども『箴言集』⁽¹⁾には反感と嫌悪しか示していない。

ラ・ロシュフコオの『箴言集』は文体の簡潔、比喩の巧妙、断定の鋭利など、その技法の面に於ては最高の作品たることに何人も異論はない。しかし、そこに展開される思想についてはこのように極端に相反する評価が対立する。概括していえば、人間性の善を信じる、行動的なオプティミストはこの書を嫌悪し、逆に、人間性を悪と観じる、分析的なペシミストはこれを讃美する。

(2)

けれど、ラ・ロシュフコオの『箴言集』ほど徹底せるペシズムにつらぬかれた書はほかにない。その冒頭に「我々の美德はおおかた仮装せる悪徳にすぎぬ。」という巻頭言がかかげられ、六百数十に及ぶ箴言の一つ一つに於て、人間の全ての美德が葬り去られていく。

彼は人間のあらゆる行為、あらゆる心理の根底に「自己愛」*amour-propre* を発見する。「自己愛」とは著者が規定している如く、「己れ自身への愛であり、全てを己れ自身のために愛すること」⁽²⁾である。それはエゴイズムであり、自負心である。世上、美德とされている人間行為の全てがこの「自己愛」の仮面にすぎない。「我々が美德と思いこんでいるものは、しばしば運命か、さもなければ我々人間の策略がしかるべくお膳立てしている様々な行為、様々な利害関係の集りにすぎない。だから、男が勇敢であり、女が貞節であるのは、必ずしも勇気や貞節のせいではない。」⁽³⁾

ラ・ロシュフコオにとっては、かかる「自己愛」こそ人間のあらゆる行

(1) Victor Cousin : «La jeunesse de M^{me} de Longueville»

(2) «Maximes» 563

(3) Ibidem 1

為の脚本家であり、演出家であった。従って、彼は人間の様々の行為の奥にひそむ一なる「自己愛」に向って常に光をあてつつ人間心理を分析する。人間が巧妙に、そして、様々に身につけている美德という仮面をはがしてしまえば、あとには怖るべき「自己愛」という一つの実体しか残らないのである。

ラ・ロシュフコオはかかる人間性の実体をあばき出すことによって、人間の安易な自己満足や自惚れや思い上りに挑戦し続けた。『箴言集』全巻がこの variation にほかならない。ここでは、友情、感謝、献身、謙遜、誠実、正義、博愛、仁慈、寛大、これら全ての美德は「自己愛」の仮面にしかすぎない。

「正義への愛とは、大部分の人にとって、不正を蒙むことへの恐怖にすぎない。⁽¹⁾」

「人間は節度というものを美德に仕立てあげたが、それは偉人達の野心⁽²⁾を抑制し、かつ又、凡庸な人達の運の無さ、値打の無さを慰めんがためだ。」

「世にいう友情なるものは単に一種の交わりにすぎぬ、互に利害を処理し合い、斡旋を交換するにすぎぬ。つまり、そこでは自己愛が常に何か儲けにありつこうと企んでいる取引にすぎぬ。⁽³⁾」

「我々が他人の美点をほめそやすのは、他人の値打を高く評価するというよりも、むしろ我々自身の見識をみて貰いたいためだ。かくて、我々は他人に讃め言葉をおくっている風にみえるが、実は讃め言葉を自分に頂戴⁽⁴⁾しようとしているのだ。」

まさしく、そのいずれもが美德蹂躪者の言葉だ。ラ・ロシュフコオは人間の誇らしげに身につけている美德という仮面を容赦なく引きむしり、これを蹂躪した。彼は仮面をはぎとった人間の素顔を凝視する。

(1) 《Maximes》 78

(2) Ibidem 308

(3) Ibidem 83

(4) Ibidem 143

(3)

ラ・ロシュフコオの人間観に於ては、情念 (passions) が人間の支配者である。人間を諸々の行為にかり立てるものは常に情念であって、決して理知や意志ではない。何人も、又、如何なる場合でも、人間はこの情念の支配に抗し得ない。「人間の心には情念の絶えざる発生がある。従って一つの情念の崩壊は別の情念の確立である。」⁽¹⁾「我々が自らの情念を抑えるというのは、自分の力によるよりは、情念の弱さによる。」⁽²⁾「情念はしばしばこの上もない辣腕家を愚者にし、この上もない愚かものを辣腕にする。」⁽³⁾

ところで、ラ・ロシュフコオにとって、情念とは「自己愛」の別名にはかならない。野心も恋愛も、情念が激しく燃えるところ、全て人間性の根底にひそむ、かの執拗なる「自己愛」の欲望充足のあがきにすぎない。

だが、情念が如何に強力であろうとも、人間にはこれと戦う理知が意志がある筈ではないか。

ラ・ロシュフコオの目からすれば、この理知なるものは極めて狡猾な働きしかしない。それは悪徳を美徳に見せかける計算と演出しかしないのである。全てを自己のために所有し、支配しようとする「自己愛」が生々しく、むき出しになった行為が美徳である。傲慢、吝嗇、中傷、怠惰、等々。これに対して、世間体をつくろいつつ、より能率良く「自己愛」を充足しようとするのが美徳である。「率直とは胸襟を開くことだ。これはごく少数の人にしか見られないものだ。通常、見受けるものは他人の信頼を招こうとする巧妙ないつわりにすぎぬ。」⁽⁴⁾「美徳は、もし虚栄と道ずれでなかったら、これ程遠くまで行くまい。」⁽⁵⁾

(1) «Maximes» 10

(2) Ibidem 122

(3) Ibidem 6

(4) Ibidem 564

(5) Ibidem 200

美德とは理知によって計算され、演出された「自己愛」の充足過程にすぎない。それは、他人に対する欺瞞を含むが故に二重の悪徳ですらある。それは人間の用心深さ、計算づくで仮装した悪徳にすぎず、世間でいう悪徳なるものはそのむき出しの姿なのにほかならない。もとをたどればただ「自己愛」につき上げられた情念があるのみ。美德は人間の情念の仮面であり、一方、悪徳はその素顔なのにすぎない。

では、人間には真の美德というものはあり得ないのか。人間の強き意志の力を以てしてもこの「自己愛」に支配された情念の絆から脱し得ないのか。ラ・ロシュフコオは言う、情念は人間の肉体そのものにもとづくのだと、そして、到底精神や意志はこれにうち克ち得ないと。「あらゆる情念は血の熱さ、冷たさが示す様々なる度合にすぎぬ。」⁽¹⁾「体質には恒例の規則正しい流れがあって、それとなく我々の意志を動かし、方向をかえる。様々な気分が合流して、我々のうちにひそかに次々と権力をふるう。従って、体質は我々のあらゆる行為に重大な役割を受持っているが、我々はそれとは知らないのである。」⁽²⁾

このように、意志よりも情念のほうがはるかに強力である故、「人間は自分が自分を導びいていると信じているが、実は導びかれているのである。かくて、精神がある目的に向っている時、心清は知らず知らず他の目的へと歩を進めて行く。」⁽³⁾ 決定的な理知と意志の否定である。人間は決して執拗なる「自己愛」にそそのかされた情念の罅から脱し得ない。

かくて、ラ・ロシュフコオにとって、人生とは飽くことなき情念の充足過程にほかならないが、その充足の妨害として働くものは、理知や意志ではなく、天性(nature)と運(fortune)である。「天性が人間の価値をつくり、運がそれを世に用いる。」⁽⁴⁾「天性は人それぞれに、生れながらにし

(1) «Maximes» 564

(2) Ibidem 297

(3) Ibidem 43

(4) Ibidem 153

て、美德と悪徳の行ないうる範囲を規定しようだ⁽¹⁾」「運と気質とが世界を支配する⁽²⁾。」

まさしく、ラ・ロシュフコオの哲学は徹底せる宿命論であり、ペシミスムである。何故、彼はかくまで執拗に人間性の弱点を凝視し、人間性の悪を摘出するのか、人間性に諸々の弱点があるのは認めるにせよ、人間はまず生きねばならない。人間の為す行為がことごとく悪徳にすぎないとすれば、人間は如何に生きたら良いのか。ただ諦観に安住して静止すべきか。

『箴言集』は徹底的な人間嫌いの悪魔的冷笑にすぎないのか。その人間性分析が如何に正確であり、その人間観に如何程真理を含んでいようとも、そこに人間の生き方の探求が、モラルの示唆が無かったならば、それは単なるシニスムにすぎないではないか。

だが、彼の哲学はシニスムに止まっていない。彼の哲学をより良く認識するためにはそのペシミスムの源泉となった生涯の苦悩と時代思潮を知らねばならない。けだし、『箴言集』の短く断定的な断章はいずれも体験と観察の結晶であり、当時のサロンを母体として生れ出たのである。

(4)

フランソワ六世、ラ・ロシュフコオ公爵は幾多のフランス文学者のうち最高の貴族の出である。家系はフランス南西部ラングモワ州の大貴族で、すでに十一世紀に歴史にその名がみえる。15世紀から宮廷にも勢威を持ち、曾祖父は名君フランソワ一世(1494—1547)の教父であった。

だが、後年のモラリスト、ラ・ロシュフコオの生きた時代は封建貴族にとって最も不幸な時代であった。時代はルイ十三世とリシュリユーを中心として中央集権化が進み、一方、売官制度によって新たに法官貴族となった新興ブルジョアが勢力をもたげ、封建貴族は王権と法官貴族に追われて、

(1) 《Mximes》 189

(2) Ibidem 435

かつての勢威を喪失しつつあった。

しかし、フランス王家にも次ぐべきこの名家には未だ封建時代の伝統が生きていた。若きラ・ロシュフコオはユマニストとしてより生粋の武人としての教育を受けた。未来の『箴言集』の著者は領地の中の広大な城で、ラテン語は学ばず、『アストレ』のような牧歌小説を愛読した。

家門の伝統に従って軍務に服し、官廷に入ったが、彼には常に家門の誇りと中世騎士(chevalier)の倫理とロマネスクな精神が生きていた。これが彼の生涯に挫折を招く。23歳の時、王妃アンヌ・ドートリッシュが宰相リシュリューの権勢をそがんとして陰謀を企てるや、王妃と志を同じくしていた愛人シュヴルーズ侯夫人と結び、陰謀にくみし、一時獄中にとらわれる。この体験を通じて、ラ・ロシュフコオは「リシュリュー卿の治政に⁽¹⁾対して生れながら抱いていた憎悪が更に増大した」と述べている。

次いで彼の34歳の時、リシュリューはすでに死んでいたが、その後継者マザランの権勢をめぐって官廷には陰謀が渦まき、所謂フロンドの乱である。今度も彼は愛人ロングヴィル侯夫人のために王権に抗して反乱軍に身を投じ、顔に銃弾を受け、一時は失明の危険にさらされる程の重傷を負った。

いずれも、封建貴族の権威をそぎ王権を拡張しようとする二人の時の実権者に対する反抗ではあったが、彼がこれらの反乱に加担したのは封建貴族の権勢を回復せんとする意図よりも、むしろ、愛する人に身を捧げるロマネスクな騎士道精神に基づいていた。まさしく、「フランスのドン・キホーテ⁽²⁾」と呼ばれるにふさわしい。

その結果、得たものは銃弾と愛人の裏切りのみであった。肉体にも魂にも傷を受け、敗北者となった彼は38歳にして領地に隠棲し『回想録』の筆をとる。かくて、行動の武人はかつての敵から年金を受けつつ、失意と自

(1) 《Mémoires》

(2) B. Grandsaignes d'Hauterive: 《Le Pessimisme de La Rochefoucauld》

嘲と静思の文人とかわっていく。50歳頃からサロン、特にサブレ夫人のサロンにしばしば出入りする。『箴言集』の出版は51歳の時である。

ラ・ロシュフコオの生涯の苦渋が『箴言集』の思想に色濃く蔭を落していることは言うを待たない。大貴族の矜持と自負は容赦なく時代の流れに押しひしがれた。彼は『回想録』に言う、「王国のあらゆる貴族達は自分がうちひしがれ、自由から隷属の身になったことを信じたのだ。私はこういう感情を抱いて生長した。」彼が自らの Portrait でくり返し述べた顔付の憂愁は最後の封建貴族の時代の移りに対する悲哀の象徴であり、『箴言集』全巻にみなぎる「尊大なるペシニスム」(pessimisme ⁽¹⁾dédaigneux) は最後の武人貴族が新時代の軽薄な宮廷貴族に抱いた侮蔑である。

無謀で無益な戦いを終え、追放がとけて再びパリに定住し、サブレ夫人のサロンに出入りした彼は時代と社会が大きく転換したことを知った。若年の頃の宮廷やフロンドの乱の野営で交わった軽はずみで向うみずな陰謀家の貴族はもう居なかった。フロンドの乱の終結によって、ますます王権が、そして、マザランの権勢が伸長し、も早や自らの過去の権威の回復は不可能と思い知らされた旧貴族達の間には失意と挫折感が蔓延していた。

このような貴族の心を強く捉えたのは、ポール・ロワイヤルの神学者達のとくジャンセニスムであった。当時、多くの貴族が競ってこの教理を奉じた。ジャンセニスムは人間性に対して最も厳しいペシニスムをもつてのぞむ。即ち、人間は原罪以前には善と悪とを自ら選ぶことが出来たが、原罪以後は自己愛に毒されて善悪の選択能力を持たない。自己愛こそ人間が生れながらにして持つ快楽、罪である。かかる絶対的な罪の状態にある人間には善行による救済はあり得ない。自己愛という快楽の奴隷たる人間にはより強い快楽、聖寵による救済以外にはない。ただ祈願、瞑想、苦業の宗教的生活によって、ひたすら聖寵を待つべきである。

ラ・ロシュフコオのしばしば出入したサブレ夫人のサロンには多くのジ

(1) Faguet: «Etudes littéraires sur le XVII^e siècle»

ジャンセニスト達が集まっていた。サブレ夫人自身がボール・ロワイヤルと庭つづきの所に居を構える程であったし、ニコルやアルノー等、ボール・ロワイヤルの長老達がそこの常連であった。彼等は常に人間性の悪に関する問答をくり返した。ジャンセニスムにおいては人間性の悪を追求し、分析し、これを厳しく認識することこそ神に近づく道であった。

ジャンセニスムの決定的な人間性否定が当時、人間に対する不信と絶望を抱いていたラ・ロシュフコオに深刻な影響を与えたことは想像に難くない。『箴言集』における人間性認識とジャンセニスムのそれとは同じ基盤に立っている。サンド・ブーヴも言うように、⁽¹⁾ジャンセニスムから救済の思想を除けばそのままラ・ロシュフコオの哲学となる。事実、『箴言集』が世に出た時、その徹底せるペシミスムに対して一方では驚愕と非難が渦巻いたが、ジャンセニスト達は讃辞をおくった。ある神学者は言う「あなたの哲学が終るところからキリスト教徒は始まると申せましょう」と。

(5)

だが、ジャンセニスムとラ・ロシュフコオの哲学との間に如何程共通点が見えようとも、両者の間には決定的な相違がある。それは、ラ・ロシュフコオの思想体系には救済への希求が皆無であり、神への指向が全くみられないことである。

『箴言集』はただ冷厳に人間性の現実を凝視し、あくまで人間性の細密な分析と冷徹な認識に終始する。そこには人間性の悪に対する認識があるのみで、人間性に対する嫌悪や歎きや憤りの如き感情は皆無である。従って、そこには聖寵や救済への希求も無ければ、ジャンセニストの宗教生活への誘いとも無縁である。

ラ・ロシュフコオが人間に対して要求したモラルはただ一つ、人間性の

(1) Sainte-Beuve: «Port-Royal»

真実を認識する判断力 (jugement) を持つこと、だけである。「才智を持
 っていても愚者たる場合はあるにしても、判断力を持っていて愚者たる場
 合は絶対⁽¹⁾にない。」「にせの君子 (honnêtes gens) とは自らの欠点を他人
 と自分自身にいつわる人である。まことの君子とは自らの欠点を完全に認
 識⁽²⁾し、告白する人である。」

『箴言集』全巻を通じて、ラ・ロシュフコオは既製のモラル、即ち世人
 が美德と思い込んでいたものに対する攻撃に急であって、自らの積極的な
 モラルとしてはこれ以外に説かなかった。

だが、救済への期待もなく、人間性の真実を認識し、人間性の悪と弱点
 を凝視する勇氣を持て、とはこの上なく厳しいモラルである。ことに、フ
 ランスの17世紀においてはそうであった。17世紀の初期から中期にかけて、
 社交界を支配していたものは *préciosité* の趣味であった。人々は人間性の
 本質の追求は忘れ、ただ外形の優雅、繊細、洗練を追い、*honnête homme*
 という人間の理想像に酔っていた。

オノレ・デュルフェの『アストレ』(1610—27) の流行がそれを物語っ
 ている。この牧歌小説において、人物はすべて心は汚れなき愛に満ち、身
 振りはこよなく優雅に洗練され、行為はことごとく献身と美德である。そ
 れは美しくも、はかない人間の幻影である。だが、人々はこの小説をロマ
 ネスクとして受けとめたのではなかった。その中の善や美德や礼儀や、は
 ては教育、風習にいたる考察まで当時の人々の生活の規範となり道徳律と
 なっていた。

このような、楽観的人間認識に基づく理想化された人間像、人間性の本
 質の追求を忘れ、ただ、外面的な行為の洗練と優雅を追い求める当時のモ
 ラルに対して、ラ・ロシュフコオは最も厳格な人間性診断に基づく人間の
 現実像を対置し、安易なる美德への惑溺に嘲笑を浴びせた。人間が自らの

(1) 《Maximes》 456

(2) Ibidem 202

現実の姿を見失い、美化された幻影に酔っている時、ラ・ロシュフコオは人間の生身の像を提出して、時代の人間哲学を人間性にふさわしいものへ修正せんとしたのである。

『箴言集』における細密な心理分析は安易に理想化された人間像への反証であり、その冷厳な人間性の悪の凝視は人間の思い上り、自惚れに対する挑戦であった。人間には自らの弱さを忘れるという弱さが常につきまとう。ラ・ロシュフコオの徹底せる美德否定は人間のかかる自己診断の錯誤への修正要求にほかならない。

そこには、著者の体験の深さと観察の広さに基づく自己の判断力の確かさへの自負が満ちている。彼の箴言の一つ一つにおける細密な心理分析は自己の判断の正確さに対する実証であり、その大胆な断定は自己の判断力への自負に基づくのである。

ラ・ロシュフコオは人間の能力に対して最も冷厳なる評価を下したが、逆説的に言えば、人間がここまで冷厳に自己を認識し得る判断力の存在を実証したのである。かつて、行動の世界においてはみじめな敗残者となり終った貴族の矜持が、この『箴言集』の知的世界において誇り高くよみがえっているのをみるのである。この意味で、彼は *cartésien* の伝統につらなる一人であり、*libertin, esprit fort* の一人である。

ラ・ロシュフコオはジャンセニストの一人として、人間を人間性の現実には絶望せしめ、これを恩寵への希求に向わしめたのではない。彼はパスカルのように人間の弱さ、みじめさに涙することもしなかったし、神に誘うこともしなかった。ジャンセニストの人間性の悪の追求は、これによって人間を人間の世界から切り離し、恩寵を待望する宗教的生活に誘うことになったが、ラ・ロシュフコオは人間以外の力によって人間の世界から解放されようとは願わなかった。

ジャンセニストにみられる人間性の悪に対する嫌悪、悲歎、憤りは、『箴言集』に皆無である。そこにはただ人間性を悪と判断する冷厳な認識

があるのみである。如何程そこに人間性の悪に対する追求があろうとも、『箴言集』は人間を絶望に導びく書ではない。それは人間の判断力の偉大さを実証する。

このように考えれば、『箴言集』に人間性の悪に対する冷厳な認識があればある程、それは大いなる人間肯定の書とすることが出来よう。そして、人間には自らの弱さを忘れるという弱さが永遠につきまとう限り、それは吾々に人間的諸条件を背負ったモラルの探求を永遠にせまり続けるであろう。

参 考 書 目

B. Gransaignes d'Hauterive: «Le pessimisme de La Bochefoucanld»
(Armand Colin)

Fortunat Strowski: «La sagesse française» (Plon)

Prévost-Paradol: «Etudes sur les moralistes françaises» (Hatier)